

し、港市においては活字出版の発展に支えられて、中国系やアラブ系の「外来東洋人」や欧亜混血者、現地人のエリートたちが法的地位の改善運動や民族主義運動を開いた。内陸部においても、都市での労働経験を持つ若年層の中に反植民地的なイスラーム神秘主義運動が展開した。前者と後者の運動の間には、権威の復活を図る現地人首長など複数の介在者が存在しており、植民地政庁の反植民地運動理解もこうした人々の提供する情報に左右されざるをえなかつた。

終章では、広域秩序と地元社会を介在する港市支配者や植民地期の現地人首長・官吏の importance が改めて述べられる。

本書の末尾で著者が指摘するように、圧倒的な量の情報が氾濫する今日、情報を提供し伝達することのできる介在者の数は無数である。しかしながら、いや、であるからこそ、介在者の主体性に着目し、さまざま世界観の形成過程やそこに潜む恣意性を見極めようとする本書のような視点が必要とされるであろう。東南アジア史の研究者のみならず、広く一般の読者にも読まれ

るべき一書である。

(長田紀之)

角谷英則著

『ヴァイキング時代

——諸文明の起源 9 ——

(学術選書)

京都大学学術出版会 二〇〇六・三刊
B6 一八七頁 一八〇〇円

北欧の学界では、およそ八世紀から一世紀にかけての時期（国によってややすればある）を「ヴァイキング時代」と呼称する。当該時代は、スカンディナヴィア世界へキリスト教をはじめとするヨーロッパ文明の諸要素が導入されると同時に、スカンディナヴィア人がヨーロッパへと広く展開した時代でもある。本書はスウェーデン考古学の最新の研究成果に基づき、この「ヴァイキング時代」の特徴を浮き彫りにしようとする意欲作である。

内容紹介に入りたい。第一章「[ヴァイキング時代]を考えるために」では、本書の基礎姿勢を確認する。筆者は、「人と物、情報が大規模かつ長期的に、特徴的な移動

をくりかえしはじめるこことによつてはじまり、その動きが鎮静化することによつておわった」時代こそヴァイキング時代であるとする見方に立ち、一九世紀以来の研究史が創り上げた「ヴァイキング時代」という時代の固定イメージが孕む問題点を、近年のヒストリオグラフィ研究に拠りながら指摘する。第二章「移動の時代—銀がたどつた道」は、スカンディナヴィア各地で発見される貨幣を含む銀製品の探し方を探る試みであり、近年研究の進展がめざましいバルト海沿岸部から黒海にかけての発掘集落と考古遺物、そしてその解釈枠組みの再検討である。本章には本書全体の三分の一近くの頁が割かれているが、グロビニヤ、スター・ラヤ・ラドガ、リュリコヴォ、ゴロジシチエ、グニョズドヴォ、ボリショエ・チメリヨヴォといった東スラヴ世界の遺構群に残存するスカンディナヴィア人の痕跡を、ひとつひとつ丁寧に紹介している。第三章「ヴァイキングを生んだスカンディナヴィア」では、メーラル湖に浮かぶヴァイキング時代スウェーデン最大の交易拠点ビルカを取り上げ、その交易拠点としての役

割を再検討する。近年の成績報告に拠るならば、ビルカは、かつてピレンヌを批判したS・ボリーンが説いたような東欧と西欧とのモノの中継地ではなく、東方世界との交易に重心を置いた都市的集落であつたと論じる。第四章「ヴァイキング時代の社会」では、贈与慣行という点からヴァイキング社会を見ることで、近代貨幣経済社会とは異なる当時のスカンディナヴィア人のメンタリティに沿った社会慣習があつたと推測する。その一方で、H・シュトイアーラが精力的に研究を進める分銅の存在に注目し、ヴァイキング時代が単なる贈与社会ではなく市場経済的な要素の萌芽する時代であったことを指摘する。第五章「ヴァイキング時代の王権と都市」では、以上述べてきたヴァイキング時代の交易の舞台であった都市的集落の成立に王権がかかわった可能性をさぐる。取り上げるケースも一〇世紀末に廃棄されたビルカからその直後に建設されたシグトウーナへと移し、キリスト教文明の中へと組み込まれてゆくスウェア王権の性格変化に注目する。

以上の紹介から諒解されるように、本書

の焦点は主として現在のスウェーデン地域と東方世界の交易にある。筆者は本書を近年の研究の紹介であると控えめに位置づけるが、スカンディナヴィア世界と東方世界とのつながりを前面に押し出すことで時代相を浮き彫りにした当該時代の概説を、評者は知らない。その意味では本書は紛れもなくオリジナリティをもつ著作であり、キリスト教文明世界の「辺境」でおこつていた社会動態を知ろうとする者にとっては極めて示唆的である。また、適切に選択された写真、図版、図表が本文の記述の説得力を高めている。

とはいって、評者は本書の議論を補強する文献史料の利用法があまりに安易である点を懸念する。とりわけヴァイキング時代の王権について論じた第五章は、タキトウスを引き合いに出したかと思えば、突然一三世紀に成立したサガ史料群や一四世紀の写本で伝わるスウェーデンの法典史料というヴァイキング時代からは遠く隔たつた時代の史料の文言をほとんど無批判に引用することにより、王権のあり方を表現しようとしている点で問題である。評者

は、筆者が用いた史料の証言能力が皆無であるとまでは言わないが、仮に同時代史料とはいえない史料を証拠として用いるのであれば、引用箇所の情報伝達経路や写本の作成状況に関するもう少し注意を払うべきであると考える。

(小澤 実)

ロバート・サーヴィス著／中嶋 毅訳 『ロシア革命——一九〇〇—一九二七——』

(ヨーロッパ史入門)

岩波書店 一〇〇五・六刊

四六 一八四頁 一二〇〇円

平易に読めるロシア革命の概説書が出た。著者サーヴィスはオックスフォード大学現代史学部教授などを務める練達のロシア史家。原著は一九八六年に初版が出た後、一九九一年に第二版、一九九九年には第三版が出た。本書はこの第三版の翻訳で、この間の史料状況の改善と議論の進展とが十分に盛り込まれている。副題にもあるように、

一九一七年だけではなく、革命を挟む約三